女大学[illegible]

女六歌仙之図（にょろくかせんのづ）

左 小野小町

おもひつゝぬれバや人のみえつらん
ゆめとしりせバさめざらましを

右 式子内親王

わすれてハうち歎かるゝゆふべかな
われのミしりてすぐる月日を

左 伊勢

みわの山いかにまちみん年ふとも
たづぬる人もあらじとおもへバ

右　宮内卿
ふきまさせばありてむすびに咲きあへぬ花もちるらんみよしのの山

左　中務
ありしだにうかりしものをあかずとていづくにそふるつらさなるらん

右　周防内侍
恋わびてながむる空の浮雲やわがしたもえのけぶりなるらん

小式部内侍

和泉式部の子也和泉のうら
むらさき式部と同じ時帝の
寵愛の小松かれたる
しふ
あとこりや
拙しれいふ姫小雲
千代をもゆづると
ありしが
かく縁じたる
妻もとのごとく業へたるとく

斎宮女御

貞信公の御娘式部卿重明
むかしが天子久しく御幸
あらざりし御琴ひきて世をふ
時しもあれいなばの風の
演よせる琴の音人の
うらむべしやハ
此之し
いかでかいなばもそのとき
... しん秋の幾の神ぶすめがみ

紫式部

一条院の后妃上東門院につかへし女房なり源氏五十四帖の作者にて其才の秀でたるのみならず婦道のうへもしとやかにて其身をつゝしみても又世に物がたりの多けれどいへども是にならび優にやさしくたぐひ外ハなし

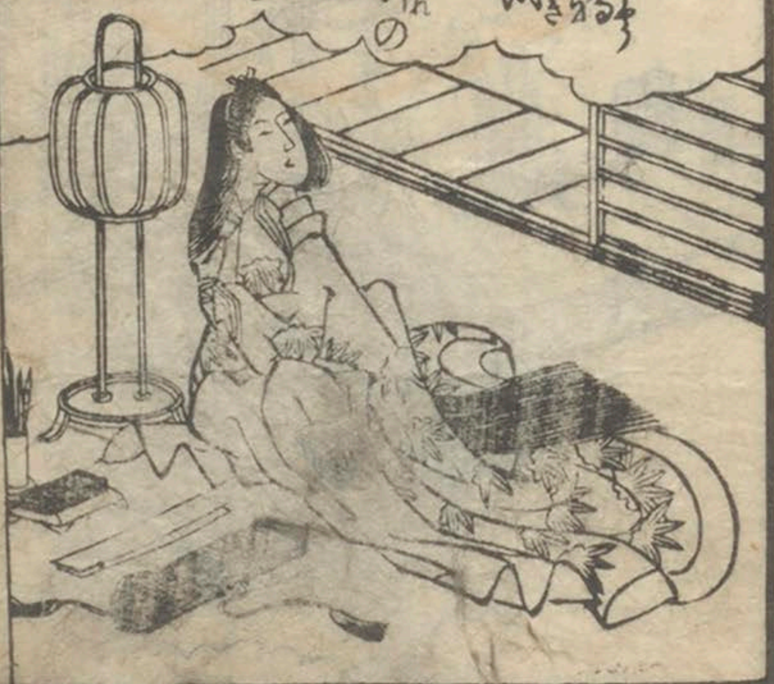
和泉式部

平井保昌の妻なり常に法華経を信じ女人女菩薩肉身夜叉の道理をさとし地獄の画巻物を見て

おそろしや法花の枝のたよりもなくいかなる罪のあるぞ此歌ぞ

伏柴(ふしゞば)の
加賀(かゞ)
待賢門院(たいけんもんゐん)の侍女(じぢよ)
花園(はなぞの)の左大臣(さだいじん)に
[illegible]そめけるが
中納言(ちうなごん)[illegible]
[illegible]
かねてより思(おも)ひしことぞ
ふしゞばのこるばかりなる
なげきせんとは

待宵小侍従(まつよひのこじじう)
[illegible]
[illegible]
まつよひにふけゆく鐘(かね)の
こゑきけばあかぬ別(わかれ)の
とりはものかは
されば世(よ)の人(ひと)待宵(まつよひ)の
小侍従(こじじう)とよびけり
新古今集(しんこきんしふ)にいでたる
歌(うた)なり



およそ女子を教育する
親のこゝろへ第一なる
おとなしく生る
なふ生長をさするべし
まづ手習ひよりその
器量よして手師匠の

学文よろしき師をえらみ
つかはすべし手ならひは
子供のしわざなれども筆跡はしやの
まなし義き男のおそきもの
ひとりだんかりのあさを
まじはらずして
花ながくの
あとをや
いまん

琴は雅代に申し
おこりをりつく
あらく作りしより
ちりまる今用る
十三絃のあとを
いゆるのならく
をゆ家あり
女れ此つときとあく拵
しきとかくえらめひ
うしつむぐ業事てし
みなすぎはつてあれは
女やの仏さへをとりひ

中られをとゝめらる
りのぞかし
三味せんハりしつまゝきゝより
まさりしりのえそのみ縁のそわ
石村けんだうひきうるひし
より代ゝふ
流さらく魅を為
その有ら
中ゞ折蒼の
もとつと
ありしなり

花はまがきの
ながしき
ながしからざるを
あくまではそのく
別して世の花ながどれ
すゞきのへところしかれば
たゞ千するはうちておもやうふ
つよりとぬくそこのまし
香ハ東山どのゝ時代より
ありありともちかもちる世帯の
わくらわそびうる御会しきなどかくきたし

香会わきまへされどもこゝろふかきは
茶の湯ハ
人倫の礼を
たゞしふかきの
交り世の茶の
湯は古きよりし
しば角ぐしめかふ
すぐし武法ハ家くの
流義がくしきわが師にうつきて
学ひ多くべし

文(ぶん)かよはしもあひかよはせ
どもぞくにつゞけがきさたと
よしなきたは事(こと)あるものなり
おなじ中にも似(に)げなき事(こと)
なし。文(ぶん)しやう中(ちう)もされば
かどくをかんじ文(ぶん)言(ごん)も
べしらやすの方(かた)へそりやく
なまうぶれんなり。又さも
あまきかたかなすべからず
くどくどしうんれんの
みちのよのかゞくかきまぐ
なれなどくおどろしく申(まう)し

みだりがはしく申しの状(じやう)にも
すべてかなばかりをもじ
あしくるべし。祝儀(しうぎ)の状(じやう)に
ちとしたゝめて書(かく)べし。悪(ご)言(ん)
なくのふしぶしなどおふくの
御祝儀(ごしうぎ)めでたくとせり
かくべし。又老(らう)人の病(びやう)気(き)ある者
ふしの病(やまひ)のおんびをそひ
兄(きやう)つぎに成(せい)人の心(こゝろ)ざしなどく
べしとり川とな陰(いん)るなら
ればひのぶじなる事(こと)なく
あるまじきなり

女通用文章(をんなつうようぶんしやう)

久(ひさ)しくおとづれ候(そうら)はぬも
新(あら)たなる春(はる)のよろこび
まうし候(さふらふ)とも
千里(さと)もおなじ
おくりまうしく
岩井(いはゐ)の
清(し)水(みづ)くみ

いつくしく　容儀よく
あさましく
れいぎしる事○
おそれ
目出度
身よく
よく
あまさ
れ
あはれ
こころやす
身つくし
[redacted]めし
よからへく

女中朝夕心得の事
女かうしのめでたうんと
まそてのまゆしうれをわざと
見そぐかくかかうして
たとへすぐろしくとも
かこともくぐうしるべいるも
見ぐるし　朝夕の髪
よろし
のかみなるさかれはさるまで
さればしいるべにいおしらく
あそきがよく　いつそんなよ
こみくめうぐれにめく

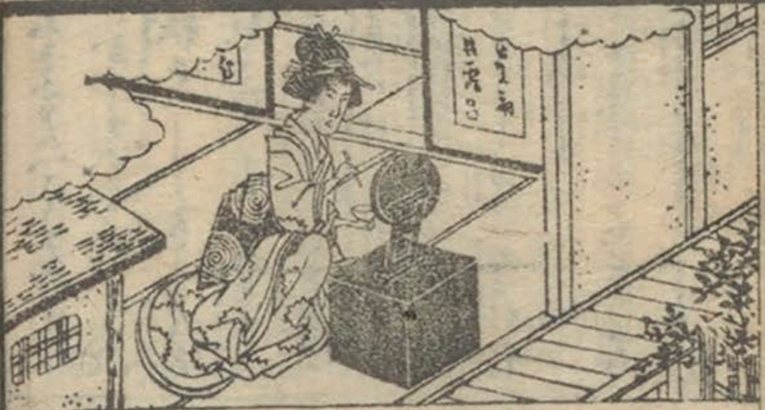
正月蓬莱

まづは御祝儀(ごしうぎ)申上度
かしく
新(しん)しの初春(はつはる)
すゞめでたくめでたく
かしく

同 正月

御(み)身(み)やまれまゐらせ候
ともどく(?)申入候

太きに見へて見ぐるし
○おしなべてかくと仕(し)だし
候(そふらふ)べしとあるを御(ぎよ)
あまぶ(?)おしなべて候ふ
るは見ぐるしきものなく
書(か)は津々浦々まで
秋はおしなべて何をさし
てよし、人の字(じ)仕(し)候
よろし
○まのあたりかく書
おのまのあたりしとん
るべし



妻のかゞみハ入門早く致さん
のしかへるてかゞみをも
機嫌よく妻鏡とり経を
めで見るとりまゝ撫るを
其の紅粉井にむかくとの
なかめしられしなかよて
まつ油包しまで撫く
しとはしめてよろしく

○きいずしへずいぶんよく
かのふて天の雲井の雁
の羽をのしてうすよくと
まくるがごとく鳴きてきハ
だしぬけにうゝしゆび
たへより上てまでずつと
けんべし大にもふかさ
へかにはふ大びさ之背をき
部ふかびさ之背ひくきふ
大びさ之ぶんも細かるぬ
あの事なり
○もぐろの毎日むべし

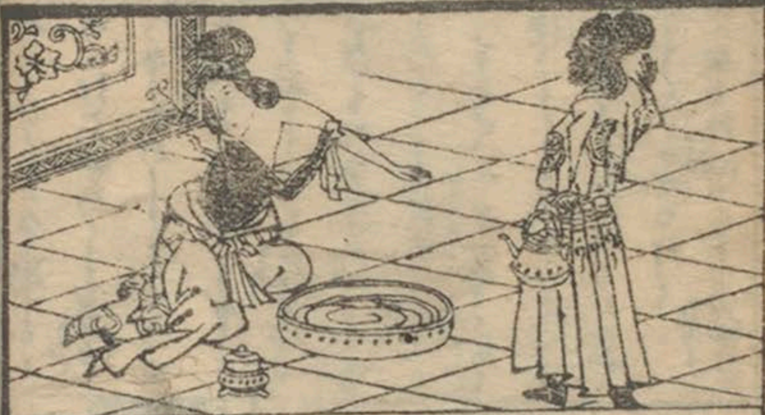
西王の仙女西王母の庭ふ
三千年ふ一たびなる
天の桃あり之を
食すれバ三千年の寿をたもつ
しかるを世の中にして東方朔之
きうをぬすみてくらひ
九千歳のぜんわんを保ちたる

三月節句の祝

桃の節句と云しなく
めて度かりしはちかくは
はなしは擬態よくは雛
しく束をいつ弁ふり
桜もわかくしまたら
立雛でも対をとにていし
よまきも久しんれを以忠

ふしのたからなる嬉ほよし
あら鏡つやおくそのあると
たしかりてわしまんれあり
軟杵をすまとしますぜく
つるべしくを深ていく
きびものめびをむべしき
うつくしく流やよしと
○すゞきれそる上あかるぶおく
ゆうしく見へてよう
あふかりをぞするいや
しくてゆるなり
○かもの油かるとの油よし

三月中のひ
さくら月
すへ春月



井し髪あらひやう　めで髪ぐし

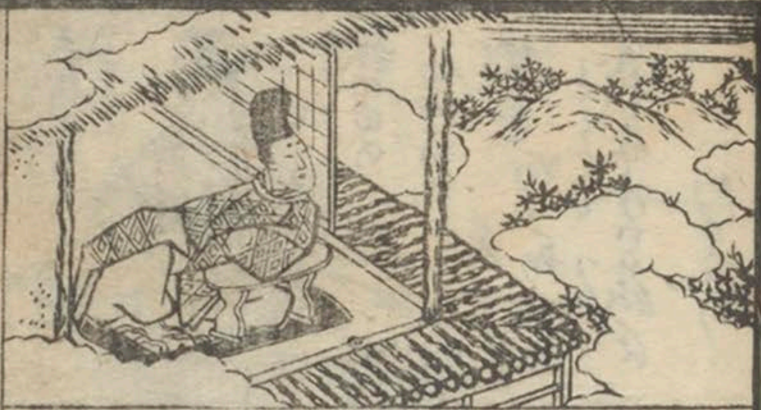
同　あらひやう

此あめのしるきをんの心地よ
き毛しの御のよく毛生の
くし
此まがめて髪のつねよき
穀く此穀ひとへ五ほうく
みうくちとく此へ右へ

そのあとをもちへは
桐の木をせんじ洗ひて
よしまうしかみさいく
あふへば志あしくなり
ものなり洗すぐれして
おうもよくおちし
○あらひ粉仕様
ぬかさげ　五合
くろ石　二匁
白檀　一匁
右細末にして用ゆべし

くろ衣をきるくとの
事を祝ふなり
かうりの皮衣をもち
天皇かしてよく稼ぎ
刑部かもあり給のころ
白くしてきぬをとほし
するなり
○かしの稼ぐるふし山だちの
葉たる黒焼するごろの
あぶりて稼りたびく
はくれば夜のちを
たるなり

めでたうし
五月節句の事
あやめの御殿葺めでたく
ねりしまげろく粽子あり
粽くの祝儀ありて定めし
祝いさ事しく御旗甲子飾らせ
られしことをさらし出し
冑幟ありて太刀甲志んと



五月　さつき　あやめ月
早苗月　たちばな月
○四月朔日より五月四日を
袷を着すべし
○五月五日より
帷子を
着すなり

天智天皇

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ我衣手は露にぬれつゝ

めでたしく端くふ新しき友
ますしとめて参らし
候まゝす
御姉様しの御のまく
おゆく黒ふむひうしも
とかく成もあく御様
嬉よかしめて参らせ候
さてとや端午の御祝儀御下

持統天皇

春すぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天のかぐ山

柿本人麿

あし引の
山どりの尾の
しだりをの
ながながし夜を
ひとりかもねん

らんまんとの御返事被下
殊さら御岩井拝見いたし
ひとかたならず御懇意之
御納涼の所へ拝ぎんの
ほどよしとの
古園の
一筆しめし参らせ候
暑中御見舞

山辺赤人

田子の浦に
うち出て見れば
白妙の
富士の高根に
雪はふりつゝ

このたびは御機嫌よく
御凌ぎ被成目出度
存じ候何れも
ともども
あらたまの御めでたく
屋
まづ川の
暑中御見舞

猿丸太夫(さるまるたゆふ)

奥山(おくやま)に
もみぢふみわけ
なく鹿の
声(こゑ)きく時ぞ
秋(あき)ハかなしき

六月
みなづき
風待(かぜまち)月
蝉羽(せみのは)月
林鐘(りんしやう)

中納言家持(ちうなごんやかもち)

鵲(かさゝぎ)のわたせる
はしにおく
霜(しも)の白(しろ)きを
みれば夜(よ)ぞ
ふけにける

御賀ありがたくめでたく
かしく

同 返事

御告(つげ)のごとく残暑(あつき)
打つゞき(?)まいらせ候
くれ御はんじやう(?)御座(ござ)候
…

[illegible]

安倍仲麿

あまの原
ふりさけ
見れば
かすがなる
みかさの山に
いでし月かも

御菓子下され御念入
めしかへしもの
らへ御きげんよく
御礼申しまゐらせ候と
御めでたく存じまゐらせ候
中元祝儀の御
一筆しめしまゐらせ候 いまだ
あつさつよく候まゝ御

喜撰法師

我庵は
都の
たつみ
しかぞすむ
世をうぢ山と
人はいふなり

肉なき御精ひかへよく
御機嫌よくいらせられ候と
めで度存じまゐらせ候 扨は麻
まつの麸 とも
鯖 素麺一折
まんよろしく 誠に
盆の御祝儀として
まゐらせ候 かしく

小野小町

花の色は うつりにけりな いたづらに 我身よにふる ながめせしまに

蝉丸

これやこの ゆくも帰るも わかれては しるもしらぬも あふさかの関

猶々書〳〵はとかく候
へもよ結〳〵御清く
ましわきれ〳〵めで
たく〳〵かしく
日 返事まいる
御結あきれ〳〵の
卿の〳〵いまく〳〵し
たんたん暑さ〳〵いかゞ

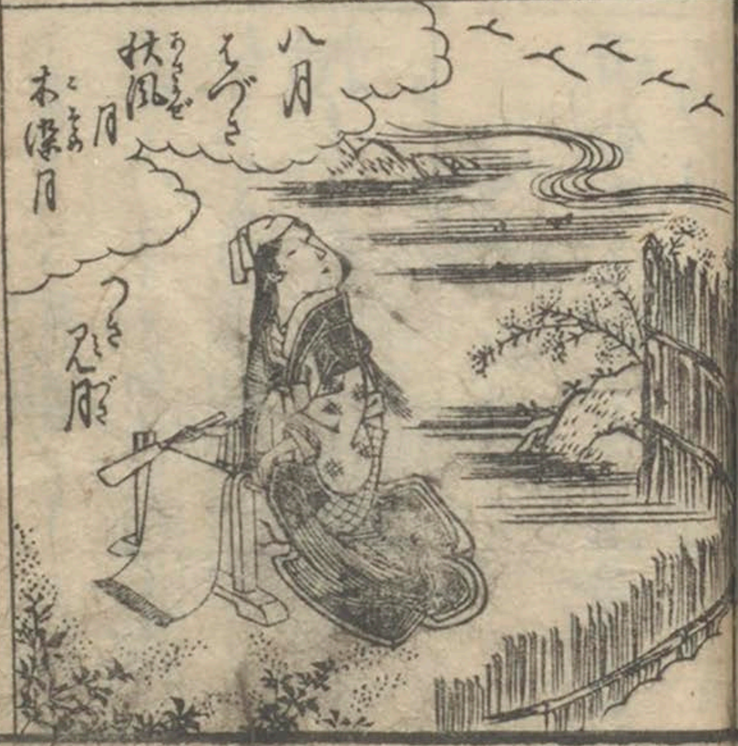
参議篁

和田の原八十嶋かけてこぎ出ぬと人にはつげよあまのつり船

僧正遍昭

天津風雲のかよひぢ吹とぢよ乙女のすがたしばしとゞめん

此さんのはつしきめでたく
ありし撰から菅丞の讒
事として[illegible]
あきれ[illegible]
夜の[illegible]目
の[illegible]
まゐらせ[illegible]
[illegible]



陽成院(やうぜいゐん)

つくばねの
みねより
おつる
みなの川(がは)
こひぞ
つもりて
淵(ふち)となりぬる

しまりて随分(ずいぶん)と凌(しのぎ)
うちくらしかたきゝを様(やう)
あがりの程(ほど)あらまし
此(この)ことはりをしめるべ
し

八朔(はつさく)の祝(いはひ)

田面(たのも)のたのみとて目出度(めでたく)
おのし儀(ぎ)を朝(あさ)夕(ゆふ)を

河原左大臣(かはらのさだいじん)

みちのくの
しのぶもぢ摺(ずり)
誰(たれ)ゆへに
乱(みだ)れそめにし
我(われ)ならなくに

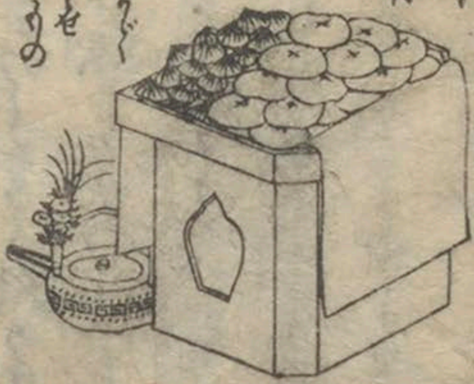
余所(よそ)ながらもおもてに濃(こ)し
叢(くさ)むらの嵐(あらし)のすゞしく
ふかき節(ぶし)ごとにきこゆれめでたし
なりし扨(さて)ゆめつし
うれしき利(り)もよろしと一(ひと)つ紀伝(きでん)を
上(じやう)いかし淡(あは)ふうみなさし
うつ志(こゝろ)に深(ふか)く綴(とぢ)りけれ
めでたかるべし

光孝天皇

君がため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ

九月　菊月　長月　紅葉月
祢ざめ月

九月朔より衣服のはあはせをきる
九日より三月晦日迄
綿いれをきる



十三夜の月見
しんこにむいもの
御そなへを祝ふ

中納言行平

立別れいなばの山の峰におふるまつとしきかば今かへりこん

九月節句の文

重陽の御嘉儀ことに目出度存候
さてもとかく
よろしく御取はからひ
たのみ入まいらせ候
菊一籠まゐらせ候
猶々御目もじにて申あくべし

在原業平朝臣

ちはやぶる神代もきかず竜田川からくれなゐに水くゝるとは

ましゝ山ふかくひとしれ
ずしらしし
日へ
て
菊華の○の水を呑井して
ゝ露茎[illegible]経義をとく
して見たる[illegible]あり
下されたる[illegible]まふ
とよ[illegible]のひかりし

藤原敏行朝臣

住の江の岸による浪よるさへや夢の通ひ路人めよくらん

慈童は周の穆王の寵童[illegible]
王の枕を越えて罪
に落されて[illegible]
きくの[illegible]の
文を授く
[illegible]
[illegible]八紀
菊の露を
なめ
しるし

伊勢

なにはがた
みじかき
あしの
ふしのまも
あはでこのよを
すぐしてよとや

よろし一日はめでたく
優艶てしとやかに女子
く晴嬉しはめりまた
なれしりまよ筆をあ
りけりし
閑暇まきんの秋
一筆しけりはとりく
人を寂しきの晴陰のまゝく

元良親王

わびぬれば今はた
おなじなにはなる
身をつくして
あはんと
ぞ思ふ

はいる日のしるやおもかく
人しそしろりしも用ゆ
つとひとて心の行よ状は
様しや玉あ一箸志んと
続しく慎みかりき有
てもよ成しいつくあれ
らくまりもまん様し
よくあらくりし

素性法師

今こむと いひしばかりに 長月の 有明の月を 待ちいづるかな

文屋康秀

吹くからに 秋の草木の しをるれば むべ山風を あらしといふらん

は　へんじ

嚴しき寒さにもよく
御機嫌よろしくいらせられ
めでたくぞんじまゐらせ候
しそ何よりの御年玉の品
下されかたじけなく御懇意の
ほどうれしくかたじけなく
猶めでたくかしく

大江千里

月見れば ちゞに 物こそ かなしけれ わが身ひとつの 秋にはあらねど

中〳〵おしはかりめでたく〳〵

存じ

歳暮祝儀御しるし

一筆しめしまゐらせ候

おしつまりたるの

こゝろの御事にて嘸〳〵

御帰りにておもしろく

くまとさ〳〵し入り〳〵

菅家

このたびは ぬさもとりあへず 手向山 紅葉の錦 神のまに〳〵

扨とや鏡餅二重塩肴

一尾ゑんどうより御到来

おのまゝぬしまでよく〳〵

尚〳〵日〳〵よりも御悦よ

をもしろくますゝ御手かりも

春をむかへゆる〳〵〳〵目

めでたく〳〵筆とめの

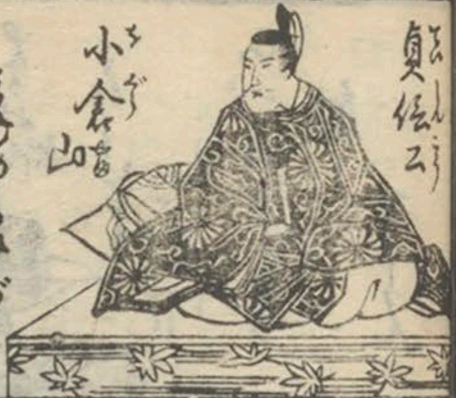
かしく

三條右大臣

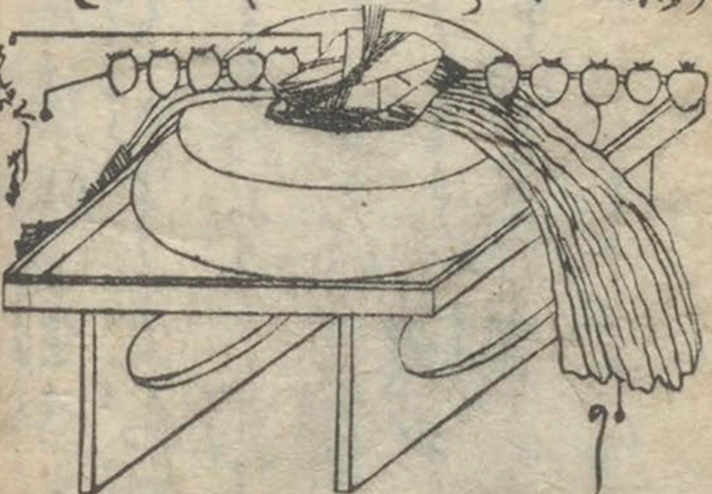
名にしおはゞ逢坂山の
さねかづら人にしられで
くるよしもがな

貞信公

小倉山峰のもみぢば
心あらば
今ひとたびの
みゆきまたなん



鏡餅
くりや
ゆづりは
うらじろ
右の品
かざりつけ
水引を
かけ
置べし



は
歳暮の祝儀として
いろ〳〵肴酒を贈
久しく出入の得意へ
贈る事ぞめでたく
御目出度御祝儀のしるし
よろこびめで〳〵
し

中納言兼輔

見かの原わきてながるるいづみ川いつみきとてか恋しかるらん

源宗于朝臣

山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

凡河内躬恒

心あてにおらばやおらん初霜のおきまどはせる白菊の花

[illegible]

壬生忠岑

有明のつれなく見えし別れより暁ばかりうきものはなし

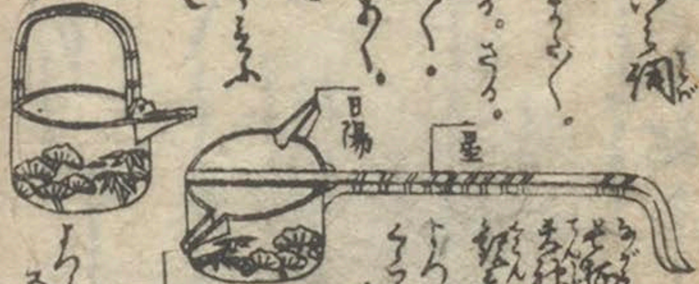
[illegible]

坂上是則

朝ぼらけありあけの
つきとみるまでに
吉野の里に
ふれる
しら雪

婚礼の席に用る調度
かへ・ひさげ・さかづき・
かはらけ・てうし・さかな・
いしなべ・おはぐろ・
なべ・のし・あはび・
いはひ・あさもの・
くすれ・あそびまる
こぞ・とらへて

○提へ燗鍋を
銀なかなかの



うちかへ
ぎんは
銀なかなか
ようく
とて
よろし

春道列樹

山川に風の
かけたる
しがらみは
ながれも
あへぬ
紅葉なりけり

はてる
ふみかへして
ほうしく
ねしの
とりくはく
おさまる
ふれ
御寿のまことし
えんれい
婚礼のよう
かくれ
おれ流れの

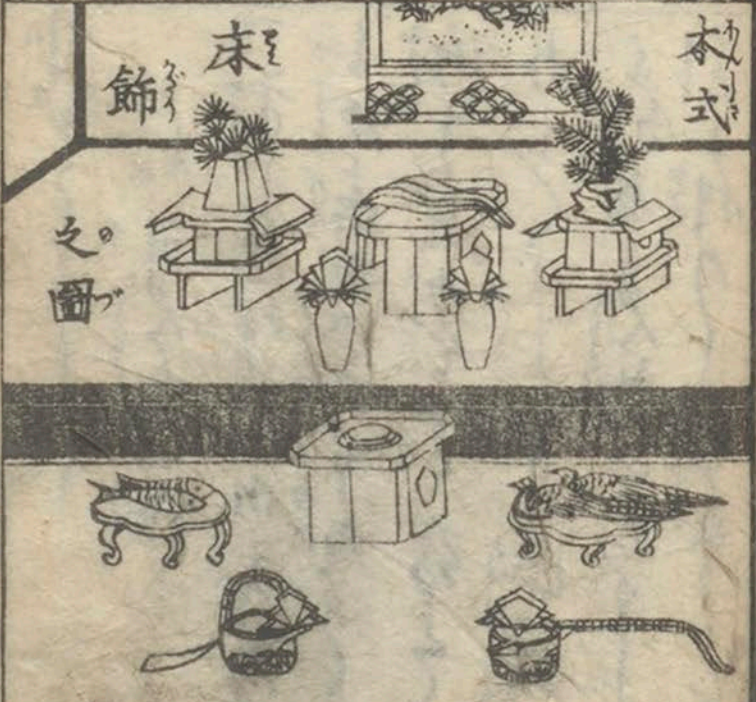
紀友則

久かたの ひかりのどけき 春の日に しづ心なく 花のちるらん

手続をもつて 此者
一筆啓上仕候
まゐらせしかしこまり
貴久しく 御無沙汰
納の
拝見のしるし

藤原興風

誰をかも しる人にせん 高砂の 松もむかしの 友ならなくに



紀貫之

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞむかしの香ににほひける

目出たくかしく

部屋見舞の文

一筆しめし参らせ候

御祝言の御式首尾よく

済せられめでたく存上

参らせ候 此一折

御部屋見舞の志まで

上まゐらせ候 幾久しく目出度かしく

清原深養父

夏の夜はまだよひながら明ぬるを雲のいづこに月やどるらん

同返事

御[illegible]しの[illegible] 梅とや

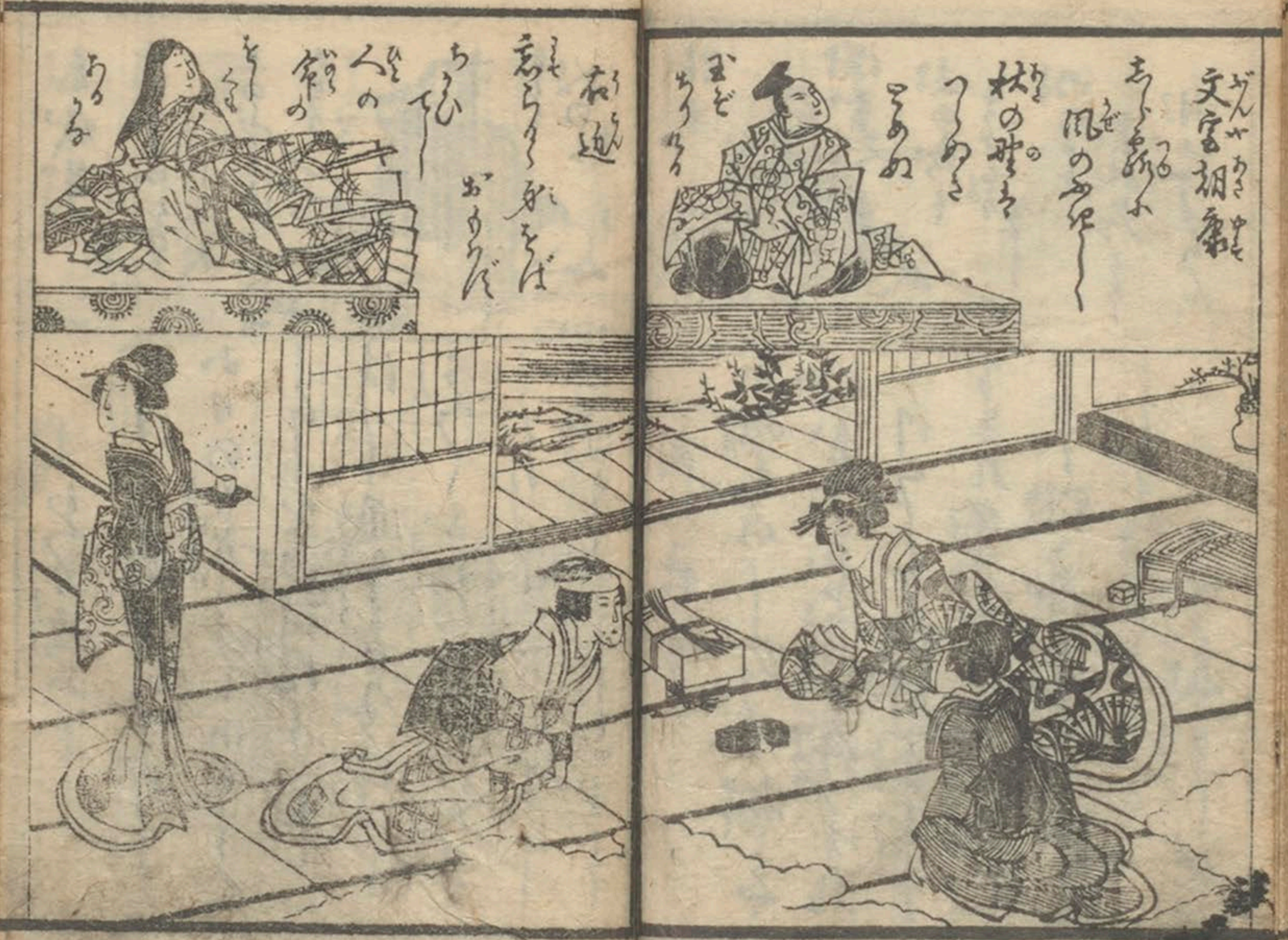
部屋の御見舞として御肴下され

ありがたく 扨[illegible]一会[illegible]

まゐらせ候 幾久しく[illegible]

しく[illegible]目出[illegible]

しく[illegible] 目出度かしく


文屋朝康
しら露に風のふきしく
秋の野はつらぬきとめぬ
玉ぞちりける
右近
忘らるゝ身をばおもはず
ちかひてし人の命の
をしくもあるかな

参議等

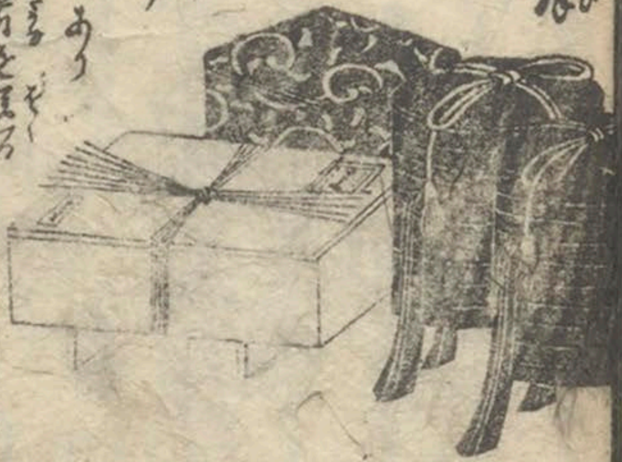
あさぢふのをのゝ
しの原
しのぶれど
あまりて
なとか
人の恋しき

平兼盛

しのぶれど
色に出にけり
わが恋は
ものや
思ふと
人の
とふまで

[illegible]かり悦めでたく
一筆しめし参らせ候
おのおの[illegible]
[illegible]御機嫌よく[illegible]
御目出度[illegible]
先く鏡ひとつ[illegible]人して
しるし[illegible]参らせ候
御目にかけ入まいらせ候

黒[illegible]
[illegible]
まんぢう
[illegible]
[illegible]まんぢう
ひらくあり
[illegible]をそへ
[illegible]



壬生忠見

恋すてふ
わが名は
まだき
立にけり
人しれず
こそ
おもひそめしか

月あつゆ
れみ方の中あわのし
げろしるの令り望
方へ来り悦び入のし
まで慇りしの相便まと
しあして好し越
下されまるのるるを
めしゆるくなれしよ

清原元輔

ちぎりきな
かたみに
袖をしぼりつつ
末の松山
なみこさじとは

はしめてなかうし
平産嫁娶のあとく
嫁れん令朔るとしあ産
おとりしまりしと宝
ともれまめふいろれ孫
又義子金のよう何方か
く眉をく何のし
わよのしてもまかるる

中納言敦忠

あひみての後のこゝろにくらぶれば
むかしはものをおもはざりけり

中納言朝忠

あふ事のたえてしなくはなか〳〵に
人をも身をも恨みざらまし

産の時向ふ吉方

正四七八月 ひつじのかた
二十一月 いぬのかた
三月 うしのかた
五月 たつのかた
六月 むまのかた
九十月 まのかた

十二月 とらのかた

さてもしき子つゝしくも
おかしく童子をきまゐらせ
のし精ごゝろ
まし御目のよろしく
よき縁ひしるしく
めでたくかしく
目出度
よろこびしよめ

謙徳公

哀ともいふべき人はおもほえで身のいたづらになりぬべきかな

肥養をおきぬれハ成實の青よろし

曽祢好忠

ゆらの戸をわたる舟人かぢをたえ行衛もしらぬこひのみちかな

平産のうへ [illegible] 安堵の [illegible] [illegible] 五臓 [illegible] [illegible] 眼の [illegible] [illegible] [illegible]

女每園文章綴

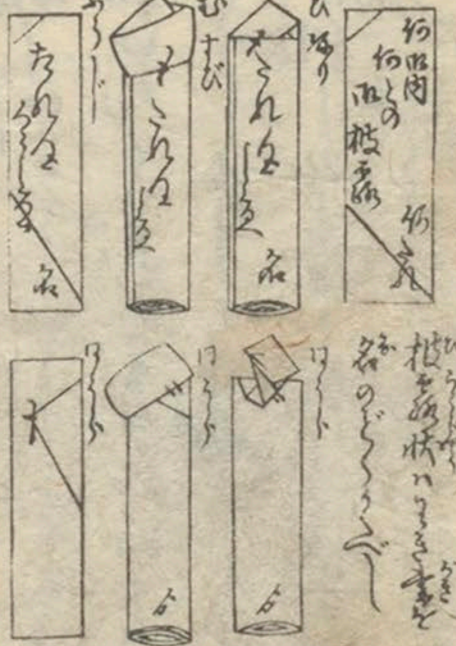
恵慶法師

八重むぐらしげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり

源重之

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけてものをおもふころかな

御封じ様の事



披露状は右のごとく書べし
名のごとくかくべし

貴人への封じは又左の方より
或は女中へはむすび封じよりひねり
おもてへはひねりより

御所にても様は二字共に書べし 殿
日をかへて返書には二字共に書べし
略しては一字にして何にても殿と用る
なりあんれは又宗卿などのかたへは
うすく書べし 上人への文
いろ紙を用ゆべし 梅がさねは
うすく書べし 女の文には上の字を紙
名のかき下の字をとまる所に書を
うすくむすびのみへ上の字
また名のかきにも書下を人のかきにまるべし

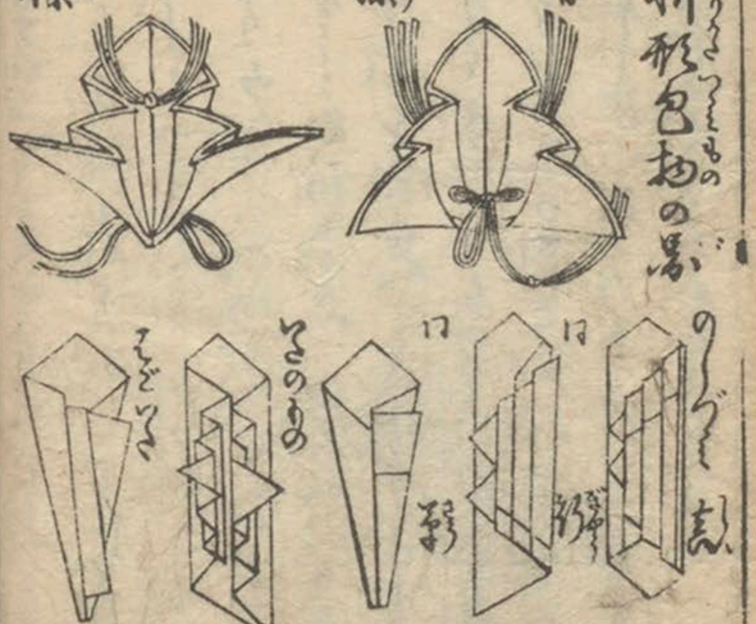
大中臣能宣朝臣

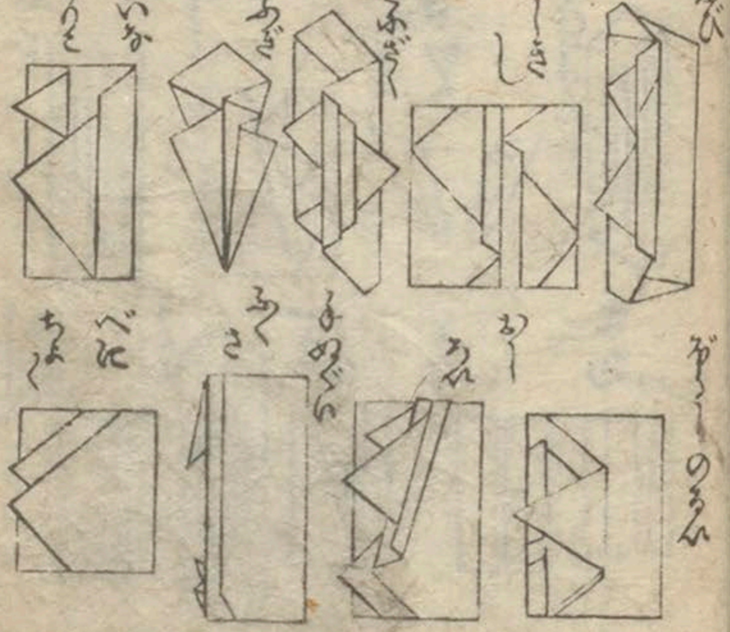
みかきもり衛士のたく火のよるはもえひるはきえつゝものをこそおもへ

藤原義孝

君がためおしからざりし命さへながくもがなとおもひけるかな

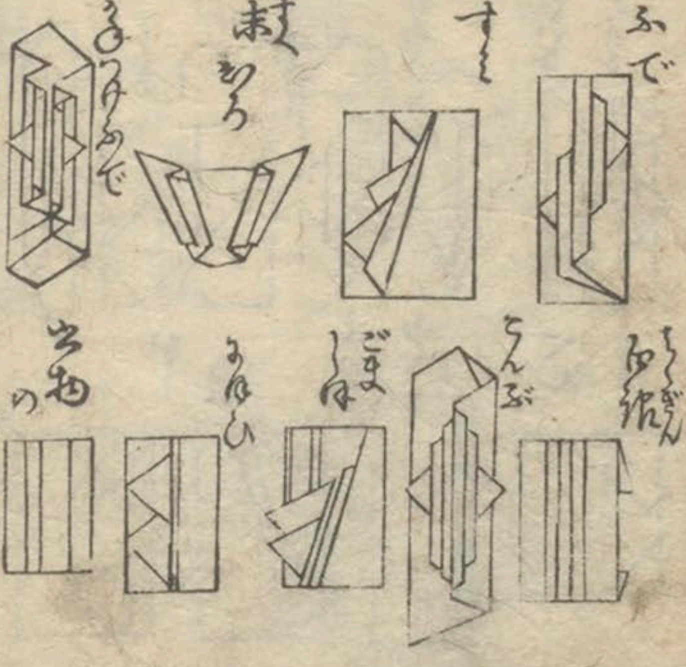
折形包物の図





藤原實方朝臣

かくとだに えやはいぶきの さしもぐさ さしもしらじな もゆるおもひを



藤原道信朝臣

あけぬれば くるゝものとは しりながら なほうらめしき あさぼらけかな

七夕のうたづくし

あまの川おりふが中に舟はあれど
かちのゆかしはかさゝぎのくし
七夕のあふせのまどろまれなん
ほしあひの[illegible]のたくぬるもの[illegible]
七夕のつまのちぎりのたえもせず
いくあきかけてむすびそめけん
まつるをばいかにするもおしふたかぞへの
おそのあふせふくるぞまつらく
万代にかはらぬものは七夕の
逢瀬のそらにものかは

右大将
道綱母

歎きつゝひとり
ぬるよのあくるまは
いかに久しき
ものとかはしる

秋もなを天のかはらに立波の
よるぞみじかき星合のそら

その九重の
[illegible]の

とりし火
[illegible]
[illegible]会の[illegible]
[illegible]

儀同
三司母

忘れじの行末まではかたければ
今日をかぎりの
いのちともがな

天の川[illegible]の
[illegible]のまふ
[illegible]

[illegible]
[illegible]の[illegible]

大納言(だいなごん)公任(きんとう)

瀧(たき)の音(おと)は
たえて久(ひさ)しく
なりぬれど
名(な)こそ
ながれて
なほきこえけれ

かしあひの袋(ふくろ)べずしき左(あま)への作(さく)
をみぢのはしをかくる秋(あき)うぜ
まされつる天(あま)のかはしふわきたちて
かはしき(かしき)をわたるなかしのうきそう
さそうづきちぎりかしれと七夕(たなばた)の
くもゐの川(かは)なやくるしうかしん
天(あま)の川(がは)うきうつの涼(かく)ふひとぶしの
はるむく舟(ぶね)吟(ぎん)やまくじ
あふそのとしふかれしぬ七夕(たなばた)の
そのむて夜(ひとよ)やいのちたなうん
鵲(かさゝぎ)の羽(はね)のつもけきの首(くび)
のきゞの梶(かぢ)ぬうはをるもなし

和泉式部(いづみしきぶ)

あらざらん此よの
外(ほか)の思ひ出(で)に
今(いま)ひとたびの
あふ
こともがな

胎内(たいない)十月(とつき)の図(あり)さま之事(のこと)

初月　二月　三月　四月　五月

はじめの月は一ぢくのかたちの
ごとくにて不動明王(ふどうみやうわう)のおんとう(?)なり

二月めはとうこの形(かたち)なり
みなみなおのうけとりなり

三月めは三鈷(さんこ)のかたちとなり
もんじゆ(文殊)ぼさつのうけとりなり

四月めは五鈷(ごこ)のかたち
ふげんぼさつのうけとりなり

五月めより人のかたちとなる
ぢざうぼさつのうけとりなり

紫式部

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜はの月かな

六月めハかみしもわかれそなハり ほそくはぎうけてあらはる

七月めハ薬湯もちひ灸治するなり

八月めハくハんぜんとうけらるゝ

九月めハへんぐわんあらそそくにせいしんあきらかなり

十月めハじやうさんにあたりうけとうあきらかなる

五月めよりおなかに帯をしかとむすぶべし おびをすれバたいじの上へつきあがらぬゆへなんざんせぬなり

大弐三位

有馬山いなのさゝ原風ふけばいでそよ人をわすれやはする

産婦心得の事

男の子をはらめる婦人ハ まづ其身をきよめ 月よりの内をつゝしみ 胎内をそだつるに 夫婦のまじはりをつゝしみ おんなのみちをまもるべし なをたべものハ みなおんなのこゝろえをしるべし 俗(ぞく)に帯をしむる事 せんじ湯をすゝむるのたぐひ その日よりの間 すこしもおこたらず おどろきおそるゝ事なく みだりにやまひなる事をすべからず

赤染衛門

やすらはで　ねなましものを　さよふけて　かたぶくまでの　月をみしかな

せんじさうづきみまゐらせかへのむべし
ちゝの内よりみてさむる時はゝ腹
みんなりてむむるのをくべくそうふみんふ
わらはゝ多くあふべし
二三ヶ月けいすいのとゞまりてそんきよ
まる時はむねまろくしておづさいでく
えをもちあく物をおもしから
ふつきかん後つもゝのをつりて
草のまざれども月をまれでおそるもの
なりいよくみんなさるよの
十月のおなかのつゝしみ
耳にあしきことをきかぬやうに

小式部内侍

大江山　いくのゝ道の　とをければ　まだふみもみず　天のはしだて

くすりのみんの時はをかしくしぞ
せうある所のぞく案をもしよ
風かつゝわらはゐしく
あつき時もよりても汗をかゝりてる母く
へるべし

伊勢(いせ)の大輔(たいふ)

いにしへのならの都の八重桜(やへざくら)けふ九重(こゝのへ)ににほひぬるかな

ものを見ればゝのおもひさうをとうつるゆゑ
あしきものをみることなかれ たゞしく端坐(たんざ)し
たゞしきものゝふみをよみてこゝろを正(たゞ)しく西王母(せいわうぼ)に
しておもひゐずしからかうかう情(じやう)をしむともやれ
まゐらすものは[illegible]あゆみかゝろ
くらくまいふんのわざいは産所(さんじよ)しげく
ちからしをとうでめくくのすなし
身(み)をもちけんけれどもゝのふとりて産(さん)
大義(たいぎ)なりくまいふんのあつさこゝろさう
ろの物(もの)をのぞし[illegible]かりしたもの
ゆゑくしもそろうくちれゆるかる
よそてまをのぐしんをまとなすむべし

清少納言(せいせうなごん)

夜(よ)をこめて鳥(とり)のそら音(ね)ははかるとも
よに逢坂(あふさか)の関(せき)はゆるさじ

懐妊(くわいにん)の内(うち)いむべき物(もの)
はうを焼(やき)あげらんぶあつき物(もの)辛物(からきもの)
くさきもの うろこなき魚(うを)たこえび かにだに
でがうさけの魚(うを)あぢさし 河(かは)の魚(うを)がざし
ひともじめんるい 餅(もち)なしくすのあんを
熱(あつ)じてかうらいきぬ物(もの)今(いま)ともらずくらうに

産後(さんご)おもしき物(もの)
そばなすび わらび たで 葉(は)なんなく
さんせうこせうちさんぶさけるり
くさびらくだもの めんるい
熱(あつ)じてかいそうの魚(うを)寒暑(かんしよ)あつ刃子有(はしあり)へじ

左京大夫道雅

今はたゞおもひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな

改正三世相大全

○子のとしに生るゝ人一代の守本尊は千手くわんおん之此人前世にて何某といふ人に金子五両を借るをうけながら今世へ生る此人前生なる人の死罪にあふをしりながらそれを助けざる也今生にては衣食のえんあり年まはりにてきづかひあるとも中年より子の年はそんちありにくしみをうくる事あり随分しんぼうすれば夫婦のえんはじめはさうさうありてのちはよくなるべし子は四人ありて二人の力を得べしとしよりては身の上思ふまゝにして栄花あるべし命は八十歳まで長命也至来のおがみ川を信心してよし

権中納言定頼

朝ぼらけうぢの川ぎりたえだえにあらはれわたる瀬々のあじろ木

相模

うらみわび ほさぬ袖だに あるものを 恋にくちなん 名こそをしけれ

前大僧正行尊

もろともに あはれと思へ 山桜 花よりほかに しる人もなし

○うしのとしの生れハ一代のまもり
本尊ハ虚空蔵ぼさつなり此人ハ前世
にて十二年ニ金子六両貫目を
うけとり今世へ生れきたりしゆゑ
知恵かしこくして又弁舌よく
たいしおもふさまによく是非を
まこと有人に親類ものをたのまれくさ
くをよくするなり夫婦のえんは
はじめの縁わるくして二三度の
えんハはじめよく中年のころわるし
あしく年より仕合よし 十八才
あしく命ハ中あたりを行べしそよ

子ハ人あり二人ハさかへる
命ハ節分ニ
まことに妙見ぼさつ
ぶきりをしんじん
してよし

○卯のとしの生れハ
一代のまもり本尊ハ文殊ぼさつ
ぞうぼさつ也此人ハ前世にて
ものに金子六両目をとりうけ

周防内侍(すおうのないし)

春の夜の夢ばかりなる
手まくらに
かひなく
立たん名こそ
をしけれ

前世(ぜんせ)へうゐのこゝろの前世にて寅(とら)うけしぐ
ものをとがめしゆへ今生(こんじやう)にてものこく
身(み)をまかすよふなり生(しやう)れどもうまれ十
すぐれて仕合(しあはせ)よし親類(しんるい)の縁(えん)
おりまじ夫婦(ふうふ)のえんたりふりて所(ところ)を
ありあふじ新年(しんねん)あんれへんだく、たとへ
べしよく縁(えん)ありし子ちやういたしてよし
命(いのち)長(なが)しこれども五十かぞく喪(さい)
なんあるべし持(もち)くしてよし宮(び)
やうとん天白(てんはく)あたりよろしふさき命(めう)
ましそんにしてよし

○卯(う)のとしにうまるゝ人一代のまもり

三條院(さんでうのいん)

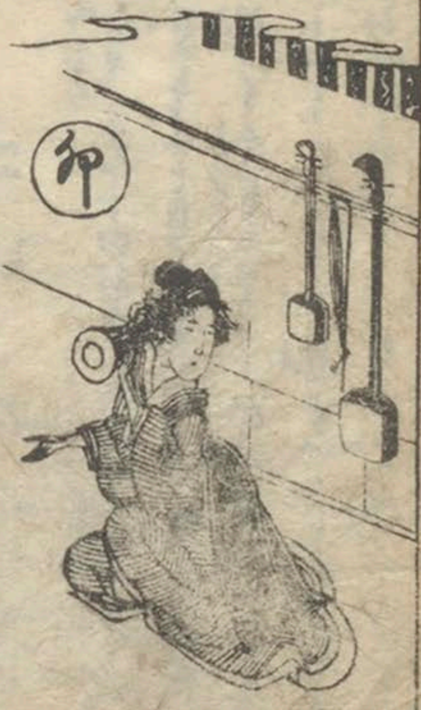
心にも
あらで
うき世に
ながらへば
恋しかるべき
夜半(よは)の
月かな

寅

ぜんぜんかえるりんどう○おきろ此人は前世(ぜんせ)にて大
蔵(づ)王まき十年と金子七千両えらうけ
ほとく今生(こんぜう)まるゝ此人ひ何さきまん
じやうなしておひ知恵(ちゑ)さいかくおもしろよ
けいふふふさしあり夫婦(ふうふ)のえんよし

能因法師(のういんほうし)

あらしふく 三室(みむろ)の
山のもみぢ葉(ば)を
たつたの 川の
にしき
なりけり



子ハ三人あり其三人のちからをえんじ然ば
病そのまゝひあり年八九までさいはひ
きたる命(いのち)ながし其しかよのしいはふ
だいあしんのいんをまんがつを縁(えん)どん
しかしよし

良暹法師(りやうぜんほうし)

さびしさに 宿(やど)を
立出(たちいで)て 眺(なが)むれば
いづこも おなじ
秋(あき)の
ゆふぐれ

○たつのとし生(うまれ)の人一代(いちだい)のまもり
ほんぞんハふげんぼさつ也此人ハ前世(ぜんせ)にて八
幡(まん)の氏子と生れ天竺国にて受生(うけしやう)て
今生(こんじやう)へ生れ出し中よりちゑあかし
てうんがよきの時分の時ちんせうあるべし
前世(ぜんせ)のちんしやう中よりふかくしんじんすべし
又ハ夫婦(ふうふ)のあいハびんぼうにあるゝ
べし子ハ三人あり三人のちからを
たのみ命(いのち)ながくもつべし
中にもよろしは新(しん)翔(りやう)ほど同じを
よきやうにしられよし
○こうのとしの生れの人ハ一代(いちだい)の守(まも)り

大納言(だいなごん)経信(つねのぶ)

夕(ゆふ)ざれば門田(かどた)の
いなばをとづれて
あしのまろやに
秋(あき)かぜぞふく

辰

かざんゐんだいなごんかつし
山人あまたすまかし大量二万と
金十六年貢をとおさめしむ
すべて山人ぜんしやのとしくしく
あまたのひとせんしやのへしくしく
ようりくるゐりかへしやしつし

祐子内親王家紀伊(ゆうしないしんわうけのきい)

をとにきく
たかしの浜(はま)の
あだ浪(なみ)は
かけじや袖(そで)の
ぬれもこそすれ

このよしきゝ二人ありて二つへふるまひしと
あらべし月に六つこそ勝きしに四十八九
ますまさなんありて十すゝて合ちやおや
あし合ひハ八十まで入て乱ほべし地獄
がを川こゝろ頭ほを川まひしおきろを

巳

権中納言匡房

高砂の尾上のさくら
咲にけり外山の
かすみたゝずも
あら
なん

信心しくくよし
○巳のとしの生れハ一代のまもり本尊
普賢のしんにて此人ハおやにはなれ
わかき時ハ金子をもちて月をくらし
かくのことく生る此人父母の字
信ずべし然れども後へえん
づきあるべし其後あのざい御かさ
くらし其所ハ年よりて後住家を
もしよくみえんあり
婦のえんハちどめふたりそのあと
さだまるべし子ハ人あれども一人の
ちからをたのむべし其六ツより親ゆるさ

源俊頼朝臣

うかりける
人をはつせの
山おろし
はげし
かれとは
いのらぬ
ものを

るすわり金六十八才まで
いきるべしされし
すこしのびる事
門てん すんぐる
本尊を
信心しかるべし

午

○未のとしの生れハ
一代のまもり本尊大日如来ひし
あしゆうえ此人善悪三年を
かならず目をつけて今じゆう生る

藤原基俊

契りおきし させもが露を 命にて あはれ今年の 秋もいぬめり

此人は万事かうくとのいのちをと
おもはくとりしむくいふく金まふけて
子に縁うすしずいぶんとの金を
ためけ神仏をいのりてよし
けなくの金をうる事有りけれど
気の上にかゝる事有り家を仕
合せよし一生の内にいくつの事
ともつくは六十二ねんに金あまし
七十のうへに一つしあわせのよ
らいかのりしまんくそんぜんそんを
ずいぶん信心して
○申のとしの生れは一代の守り本尊

法性寺入道前関白太政大臣

和田の原 こぎ出てみれば 久かたの 雲井にまがふ 沖津白波

未

ぞんぜんそる大日如来の此人お世話し
本尊なれば心よく念ずべし
又毎月を
うけゆえ
今生
此人のかなひ
はやく
人をころし(?)一へそのむくひ
みく目をまもり
よくちかひぜんごんをし

崇徳院

瀬をはやみ
岩にせかるゝ
瀧川の
われても末に
あはんとぞ思ふ

さん生のりんぐわとちぎりふかきしるしその
おかれじせうんをさゝへけい
のうねりくじゆうのうざいあく
あつめりまるべし又たびへ四ゞ
んらうするとありその縁起
うそし玄ある川のうち九八六ゝ
よし秋ふ申のうめれかおめり
よらうしうこいのちい八十三と
みく列まべしらうんぜんぜん路
至るまき川めうきんずまき川おもを
しんしくしくうしくぼらがめく
つしこ寺つなり

源兼昌

淡路しま
かよふ
ちどりのなく聲に
いく夜ねざめぬ
須广の関守

申

○関のとしせんハ一代の
身まり幸なるに動めまりたり此人お
世をしる白幕と合をちむ月そ
とけ往く今世くるのせれゆう
とろぞしかしらし歌にこうしくる

左京大夫顕輔

秋風にたなびく雲のたえまよりもれ出る月のかげのさやけさ

しるし又剃刀を用ゆる事をいましむるなり
あらし我がしごとにおゐてはあらふす
しくみのしごと成子はこらんへあり
年まで此ころより中頃は（中頃）
としよりし仕合よし中年に之
かくまづりひおくしよろし
つゝしむべし六十あまりいのち
あゆあし七十七のくらゐべ
しびゆせんちんあさぎ色
こゝろざし上ぶきげとよろし
しんじんしよし
○いぬのとしの生れは一代の守り

待賢門院堀河

ながゝらん心もしらずくろかみのみだれてけさは物をこそ思へ

酉

ほんぞん
千手八まん大ぼさつ人をまもり
承元と今年八角月さらはくらん
ぜんじ生る生れども
なとちのまじまりの
身のくらは此しづく 也あり

後徳大寺左大臣

ほとゝぎす
なきつるかたを
ながむれば
たゞ有明の
月ぞのこれる

仲ねんすぎて他かんよりの扶助の
みて大きにりつしんまうけあり夫婦の
縁もはじめはうすけれども のちには
和合ありて子孫はんじやうなり三人
ありて一人のちにしよくをあるべし
此山をれ性れしよく敬ひあつび
あらんどもの法あるしあるべし二十
八九ごろ大なるさいはひあるべし
六十八九ごろ命あやふし七十
三四ごろ孔子しびしやもん天
くまんなんにぎんがほうをしん
じるべし

道因法師

おもひわび さても
命はあるものを
うきに たえぬは
なみだなりけり

戊

○夷のとしのうまれは
一代のまもり本ぞん
八まん大ぼさつ之人
ぜんせうおほふかし白米五升と金子二両
因をうけ候 今どゆうくく
此人ぜんせのしゆ慈悲ぜんごんを

皇太后宮大夫俊成

世の中よみちこそなけれおもひいる山のおくにもしかぞなくなる

○亥

なしおろ人に今生にて衣食にあまん身の上にて不足ありてはちうよりぎゃうあるい川まるあるの一生の事あるそこに袖をさそくさいまん令なりふ八十人ありて二人のちりなき

藤原清輔朝臣

ながらへばまたこのごろやしのばれんうしとみし世ぞ今はこひしき

べし二十八九よりさいなんあるは十六七よりめるあるいのちは八十まであるべしびしや門天をしんじよしみぶつをよくしんじそうし

生まれ年ふよりて善あしをおそれ之どもよろしく

ぶつ川くおほくあさて

よつしし

をまくし

しし道ありておもひあへし

俊恵法師（しゆんゑほうし）

夜（よ）もすがら物（もの）おもふ頃（ころ）は
明（あけ）やらで
閨（ねや）のひまさへ
つれなかりけり

善悪菱（ぜんあくびし）さんじ
絵抄（ゑせう）

あしき業（わざ）ある
とおもひても
菱（ひし）はなれ
あれるとも
いはじ

よし
ちびも
神（かみ）の
ことばとぞ

西行法師（さいぎやうほうし）

なげけとて
月（つき）やは
ものを
おもはする
かこち顔（がほ）なる
わがなみだかな

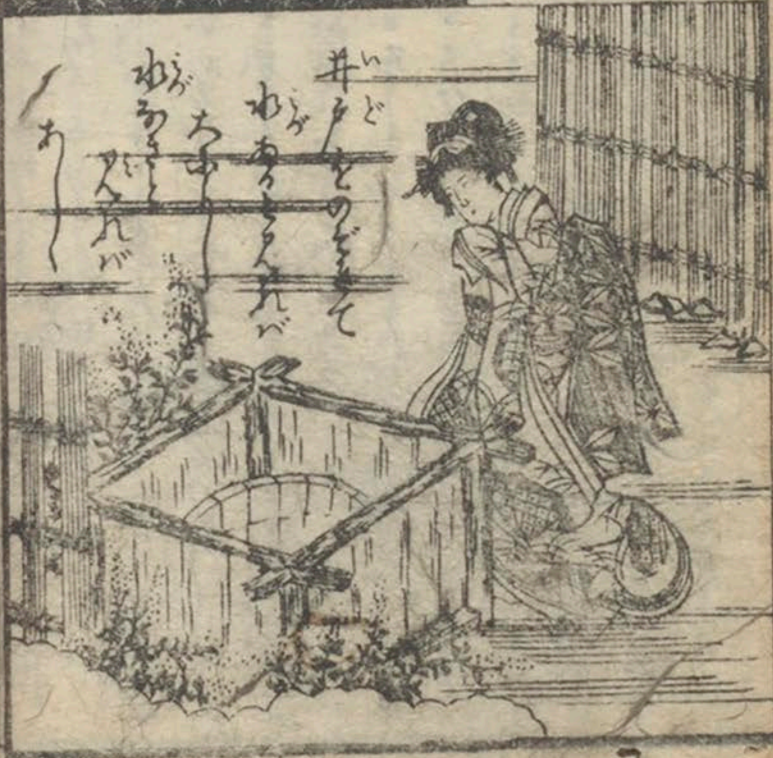
○奉公（ほうこう）の儀（ぎ）にえんれハくろうのあるべくほし
あやうし 神仏（しんぶつ）をいのるべし
○縁談（えんだん）ハ えんれハ よろし 天神（てんじん）を
いのるべし くるしからず 家（いへ）ハよし
○願（ねが）ひ事（ごと）はたのもしく ねがひかなふ
かれこれあらん よろしかるべし
○なにしごとはかゞ みちあらば よし
○こゝろざしとえんれハ中（なか）/\ととのふる
よきにとゝのふべし
○商（あきな）ひにかへんれバよろしく ことならぬべし
○旅立（たびだち）のかなひ まちがへる ものかならず おそし
○めしつかひとえんれハあきらかなり

寂蓮法師

むらさめの露もまだひぬ
槙の葉に
霧たちのぼる
秋の夕暮

皇嘉門院別当

難波江のあしのかりねの
一夜ゆへ身を
つくしてや
こひわたる
べき



○神のやしろをそこねればさいなんあり
○くものいろあしくなるしゆだんすれば[illegible]
[illegible]川あそびはよくよくつゝしむべし
○雲のみだるとみえれば大かぜあるべし
○月日地をてらさゞれば目上に禍あり
○月日をゆびさしすれば人のしらみおほし
○[illegible]すの巣をとりこわせば仏の罰あり
○草木の[illegible]をとりすれば[illegible]
○なん人[illegible]
○墓をとるしそれがいのちみじかし
○あさ日にむかひてすれば家業のさわる
○夜るなり鏡をみればが大あやまり

式子内親王

玉のをよたえなばたえねながらへばしのぶることのよわりもぞする

殷富門院大輔

見せばやなをじまのあまの袖だにもぬれにぞぬれし色はかはらず

○神のいがきをめぐるとみれば貴人に親しみられて大によし のぼると見るもおなじ

○鵰ふきてさゑづるとみれば三日の内喜事あり ねぐらと見るもおなじ

○大石をもつと見れば大によし

○いへの上へのぼるとみれば よし

○いろづめをとるとみれば大によし

○山中へ家をたつるとみれば人より情をうくる

○おしんゆるとみれば其身さかゆる

又火事をみれば大によし

○山へのぼるとみれば大によし 幸の事

○山へいるとみれば大きなるあん(あり)

後京極摂政
前太政大臣

きりぎりす鳴や霜夜のさむしろに
衣かたしき
ひとりかも寝ん

○夢をとくとみれバいのち長し
○まめをくふとみるも大きによし
○冷むぎのみづをくむとみれバよし
○むこどのゝむかへとみるもよし
○たくさ薪をみれバ枕をつけてすぎゆく有
○くだもののたねを土に入るとみれバちとむく
○まめあつうとみれバ悪しき人にあふべく
○きんのひもをとくとみれバ思ふ事かなふ
○そとから人の門ふゐるとみれバいろ〳〵よし
うしきるりでさうてあし、
○松をきるとみれバよきこゑをきゝてよし
○とりのすをとるとみれバ大によし

二条院讃岐

我袖は潮干に見えぬ沖の石の
人こそしらね
かわく
まも
なし

○山より崩るとみれバ大ニあし
○神でんらくがくをみれバ大によし
○鶴ふあふとみれバ大にあらたまるし
○つくゑをつくるとみれバ女房ひとあり
○船にのるとみれバねがひ何にかなふべし
○家の門ふいるとみれバさいはひ
きぬる地をきるとみるをおもはし
○土の門ふいるとみれバ大によし
○ひちりきをふくとみれバ人の悦ことあるべし
○づゝをうつとみれバめでたくのるとあるべし
○矢を射るとみれバ人にあつかるとあるべし
大々かつかみゆすべし

鎌倉右大臣

世の中はつねにもがもな渚こぐあまのをぶねのつなでかなしも

参議雅経

みよしのゝ山の秋かぜさよふけてふるさとさむく衣うつなり

○かしこきをあなどるところはちんじゆすゝむなり
○そのうへをあふぐところは大によし
○手あるところは大に出世あるべし
○べうぶをたゝむところはいのちながし
○剱ふく人おつめるところは中年ひる事あり
人ぞうるところはよし
○家の内ふきしくる人あるところは大こと
あつきすなはりそれをとるもよし
○しゆくしをまめかとところはおしく
○べうぶをきるところはふひなり
○しゆじのさんをかくところはてきなりつきて
きいなんあり子あきく人ハ関下に出るなり

前大僧正慈円

おほけなく うきよの 民に おほふかな 我が立杣に すみぞめの そで

入道前太政大臣

花さそふ あらしの 庭の 雪ならで ふりゆくものは 我が身なりけり

○糸もつるゝとみれば みだるゝ事有べし
○さんらんをたのしまれば ふうきなるべし
○仏神をうやまへば わざはひさる有べし
○あさの事をさきとすれば むつかしくなき有
○ちゝのよふかゝるとすれば 人おすゞるゝ事有
○たら夜をしんぐすべし
○ぢく〳〵人をうるとすれば まづしひあるべし
○ぢく〳〵を人よりおゝくすれば こゝろつかへの苦をうけて心ぼそき事あるべし
○ぢく〳〵をおゝふすれば ろうさいのなんぎとちくぶべし 又とくとつくるもよし
○かゞくするとすれば さいなんあるべし

権中納言定家（ごんちうなごんさだいへ）

来ぬ人を まつほの浦の 夕なぎに やくやもしほの 身もこがれつゝ

○すごろくをうつことこれがわるくそひろふなり
○おごりをきはむることこれハ大こくの[illegible]
○みなとをまもることこれハ万こくのちからにて大こく云
○人をあなどることこれハ身のほろびのもとなり
○岩をひくことこれがむつかしきこゝろざし
○あふぎをあふぐことこれがちんじゆうする
○あふぎをおとすことこれが大ちにおとし
○てがみをかくことこれハよろこびをのする
○きせるをさがすことこれが人のわけをあかせる
○ぜにをかぞへることこれが大事なり
○きものをたゝむことこれがおもてをそろへ
○えおつゝむことこれハ何ども[illegible]

正三位家隆（じやうさんみかりう）

風そよぐ ならの小川の 夕ぐれは みそぎぞ夏の しるしなりけり

後鳥羽院

人もをし 人もうらめし あぢきなく 世を思ふゆゑに もの思ふ身は

男女相性善悪

男木女火	大よし
男木女木	ちうどはよし のちあしく
男木女土	あしく
男木女金	ちうどはよし のちあしく
男木女水	大よし
男火女水	大あしく
男火女土	大よし
男火女木	大よし
男火女金	大あしく
男火女火	大あしく
男土女土	ちうどめでたし のちあしく
男土女金	大よし
男土女水	大あしく
男土女火	大よし
男土女木	ちうどはよし のちあしく
男金女木	大あしく
男金女水	大よし
男金女火	大あしく
男金女土	大よし
男金女金	大あしく
男水女水	大あしく
男水女木	大よし
男水女火	大あしく
男水女金	大よし
男水女土	大あしく

順徳院

百敷や ふるき軒端の しのぶにも なほあまりある むかしなりけり

諸事成就日

正月	とら	七月	とら
二月	く	八月	ね
三月	さる	九月	たつ
四月	い	十月	うし
五月	う	十一月	うし
六月	むま	十二月	うし

門出によき歌

きゝひとそまの川が うぎるふをちのねの とをみわうそうぞ はゆぞまのしき

不成就日

正七月	三日 十一日 十九日 廿七日
二八月	二日 十日 十八日 廿六日
三九月	一日 九日 十七日 廿五日
四十月	四日 十二日 廿日 廿八日
五十一月	五日 十三日 廿一日 廿九日
六十二月	六日 十四日 廿二日 卅日

夜寝時によき歌

わきひめのもすそへ うかめし うちろうも ないびてるふ きまもひの法

しげ まさ しろ ころ
つる ひさ とよ まろ
みけ さよ れん おと
つね とき こち らん
すゑ あつ ふで くゑ
りく すゑ まろ なん

さぶ いそ うや まに
いよ ころ しん りう
くね しほ みさ さの
うめ くに きく そぶ
せい つや くぶ さい
いま ゆふ りく きさ

おや ちぬ いそ すゑ
さつ りん よし りん
なか わく えし うや
とく てん まさ しぬ
そう しな ふじ ゑ
いま らく ぢう け

をと しも ふゐ きさ
さき うろ ころ まろ
せい うん つる なん
ため ゆき つね めい
とぶ ろう すゑ とゑ
もん いと こぬ あれ

しう その そめ すゞ
せき ゑ いつ うな
くめ もろ べん すみ
きん ねう さう しぬ
ゆき りせ この むら
さち まん さき ひな

おぼしれをとしる行
木から火土金水の出入
おひとつ七ッおやつそ
五ツさいおの中しあれ
ぢしんもしらく
九ッはひる七ッあめふ
八ッひでりもハッ六ッあれ
ろくは大かぜ
ねとの日そ時をしる
六ツ五ツ四ツ水ぞう
みとそれおのごむりかそ
あめの川がをり

跡見学園女子大学短期大学部図書館
a0010458800a

文政五壬午歳春三月發

畫一筆　曉　鐘成

鐘成

津村東之町　小刀屋六兵衛
心斎橋通唐物町　河内屋太助
同南久太郎町北へ入　河内屋平七

浪華書林

86074

文政五壬午歳春三月發

書畫一筆　曉鐘成

津村東之町　小刀屋六兵衛
心斎橋通唐物町　河内屋太助
同南久太郎町北入　河内屋平七

浪華書林

86074

8508 -